824
52
2

# 雲井花芳野壮士 十八

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

大正
6. 2. 15
購求

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』　請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用　挟み込み物

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用　挟み込み物

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用　挟み込み物

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』　請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』　請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

納 まあおさきへまゐりませう
善 「いかさまそれもこれにて
ト [illegible]
長 おまへのお出なり[illegible]
善 此度の[illegible]内[illegible]のことは[illegible]
長 ヘイお前さまのお[illegible]で今日も
善 「源は[illegible]
ト [illegible]
長 それや[illegible]じや何のことじや
善 ヱサア
長 それは何のことじや
善 ヘイ それでは[illegible]で今日も
長 [illegible]

善 ヘイ[illegible]今日内侍[illegible]
長 [illegible]
善 [illegible]内侍[illegible]
ト [illegible]
納 それ[illegible]
ト [illegible]
長 [illegible]
善 [illegible]一[illegible]
長 それや[illegible]
納 [illegible]内侍[illegible]
長 [illegible]内侍[illegible]
ト [illegible]
善 アヽや[illegible]内侍[illegible]
長 [illegible]
納 [illegible]
ト [illegible]

国立国会図書館 タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

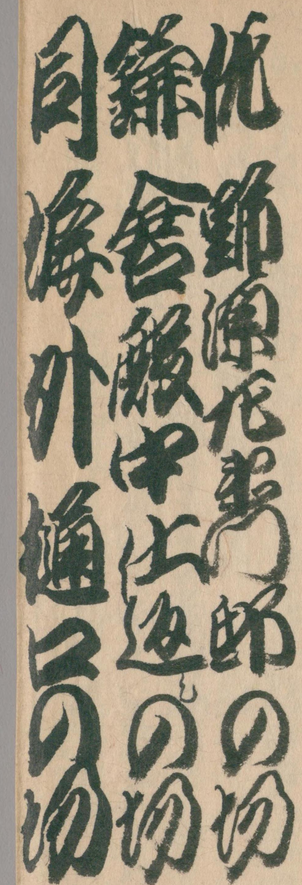
国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2　　ガラス使用



ちしり

書あつし

天明六年 [illegible]

雲井花芳野壮士（のごろもや）

於 中村鹿

八十四年

伉節源花野の坊

鎌倉殿中仕返の坊

同海外通口の坊

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

一 佐野源左衛門常世
一 三浦荒次良義澄
一 義徒 勇助
一 同 五百平
一 佐野屋傳兵衛
一 義笠岳 [illegible]
一 三浦 保[illegible]
一 [illegible]
一 [illegible]
一 [illegible]
一 下女

一 佐野ノ兵衛
一 大名
一 同
一 同
一 忠
一 [illegible]
一 [illegible]
一 [illegible]
一 [illegible]
一 下女 まき

本舞臺三間の間常足の二重正面石榴の袋此銀床の月地袋戸棚上に諏訪へ
の切割る碁盤上の方塗り骨の障子家体能所に石の手丸鉢下の方式臺附
の三間大形の袋横手にお送りいつもの所板羽目にて下手に此半垣家体に長刀を
向揚幕に屋敷の門の裏をえんせ切る小成の物る屋敷の体式重に三節下女の拵へ風
呂敷を前をにて若物を縫うている此銀に八蔵下女の形にて煙草盆をそうじを
出ている舞臺に ―― いそ之助 呉服屋の拵へ芝太郎 看屋にて竹の酒
屋形りにて三人をえんにて見めくいそいるえんは右方にて幕明く

いそ之助 見くなる紀どの完前から見しだらりはを望て居るのに何故と返るのをさしあれ
芝太郎 つんぼうてもあらしてもいつもまれそしていつも引合の勇助屋にてこへ入りしく
竹助 皆ハ今度相役付ら成らしといふるのだがこちらの方へ御活なりにら成らうお屋
所の御手をひに成り給うぞ
いそ 何んまり相ざりにら成り給ふと其に相屋ケ中に拵へる
芝太 此又勇助どのも何所へうけをかくしたり志らなれば
竹 今日は呉服を話を付てくのらハねばならぬ

いね　ぜんさんば勘定は
三人　どうも此もののぐめり舞る
三吉じ　是は又そうじん是野人　乱和上さんのきじめのふ云事をいはしゃれまする
芝太　その和上さんの云ひもの左つちの付目　感称なる夫様の此算ふ入りてゐるなれ
いね　それくゝは是成りくお不ケを郎さねばなりまの
八蔵　アゝ由うほ流じやんすお不ケおかげいとまりの雲助がおふそのまぎ
門八　をいはねば猫のすまぬサアく　ありく始めつもれ
門八　工ばおさふくめらぬかじろうろすではなれたまつてくいゝアがれ
三ひ　イヱたまつくいなるよふくおさゑくていゝうさナ
　　　お多ふくずるふお多福だてといふたがなる
　　　是く何をいふのまんざん母女子の匂してで身わ多なをも
いね　いゝあるてゆるさぬぞ
　　　何由るさぬ多ふゆるされたくなれば家主の多様ら為さ母までの三
　　　るれ思そげころちらへ仕送りよく云動きそ
芝太　それだよりではなんぞいは親身の肴ふ隠居さ母の此座ての酒の肴まで
門八　去文もたゆのいふつくらす
三芝　酒はえへ塩候嘗せら白ば庄家の流しらんど此だくらもいくらだ万去れはなんれ
八　サアそれは行のかしまれとなる猫ふ贈ふしやアがれ
いね　なまめくいればよんなてよんなぞんは去づらふ去めアられ
八　又らぬ四文をおやアがる
三　ム、おるく、おさえでしてさ
八　是は去らりお福ぞのだまつてくいゆまゆんもゝんすナア
三ひ　イヱくだまりくいふれまぬ
　　　それいゆころもいすん落猫らぬ
　　　ト皆々のくらゐ由そりあ方ふて見つゝ福助中ろの形り手ぬぐひを
　　　頬冠りにてきふうけまなる梅干看をのせ料理を仕つけし心にて出て来り
福助　下ア　みなさま御しゆあれ
三人　イヤく　お箸猫らぬ
八　ば由へきの鉢肴をとてめる
　　　こんつふア女とたのなどみでくよくたいうちと付き由アがるなかく見ゐても
　　　惜しの

りのおさんにやア是のおまへんまたきさんハ遠ふくしてるぞ

福　ハテいふてるたま川さくいるせえ

三人　イヤ〳〵たま川さくいまへん〳〵

福　お前方の目から見れバ此者を重くいつちがひるんのぶてアノくちさきにしあんれ

伊平　其さゐの身分しれ耳に情が入るふのふど

福　そうでしたらがけらど此ら代かハ暁につりぬ仕事をかくそふ今夜取極が

伊平　此松待のは普に御付ら叔と

竹　サア其のお松待の望当を叶ふせえ

三人　ちり川さハ猪ふ叔らふそれこそで三人言合せ

福　さんそく〳〵に来てさんのぶ

三さて　サアそれでまいり是らふハ私許りのからにお役料金迄を遣つて此頃大分に少しいふすの

伊平　今当年ゟのがしらと存じ、お寒ふし御仲居もし節にうふし申りどうぞ
此猪年向きの売る迄待くつかけるくれさんせんナア
言ふしそのは猪年前の売るのを待つのハ種を蒔て花を咲かせ実の熟るのを
待つよふなもの

芝太　何でもお役の付く時にそふなれと云ふ時がある

竹　当年度二なるでハ是らふ思ハお上之申して下さんれ

福　ハテお上のお耳へ入るとふれあふ是程でもいなのことでハ出来まぬ

ト　此所をうじ家侍の内に〳〵

新半　当年〳〵お寒ふいいひぬら

福　ヘイ是に居りまする田舎でつらゆるよふそれへ参ります

ト福三此に吹き掛その様子を伺ふほうとふたる

新　イヤ〳〵来るにハ及ぬ此がそこ行まふさんめ○

ト是ふべの入り合方に而陽手家侍が新年宴席へ参るお女房の迎へ
の煙草盆をさげ出て来り

当年より町人共ハ何にきゆうさめじや

三人　ヘイ私共ハ掛け
アく是らけイヤサうけざいあるのハあれ○そこ再来がめでたう参るお夫の席らく

福　良さ者のお役料とお殺じ申して此年ょりうけ願○　ト俎板の上の鯛をとらんせ
るんそ元のごくさてすでいつぬ参ぬる

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

いさ　イヤ掛ちとも鯛とハとんだ掛違さ
新　今ハ是ハ此忘れかけて居様を此福まで何事ハ京か分るとんのめつ
福　それ見さ友切りハ此玄蕃を下さる
三人　此玄蕃ようハ此拂をおさればよんかいし
新　是お福なたらハ此中ふおけられたハ出つさがけら咄を申す程ハ勝手ふ申さく
八　お方申の
新　いかくそれハお鄭らがあるおれならば私ハ宇舟人とらせて参りまする相様成
八　ならのと拝見之　ト思入り合方ふなく是又ゐる　ト　かん人出る
福　やレ嬉しやこんなに嬉しんぶり居まする
エ
新　是何事んぶりしる兎人あるで居よくお咄がありて嬉しくなる事をやるでござります
八　ホーしー○ドレいつく参りまするう
新　貴方のあるが宮居からの咄の様子ハ○ト ゐのうら人是又ゐつく小座ふあり
福　居まするの拂ひのある分あ
アヽモシ　何たる事がそれを

新　いさ　何るかしも上るまの内ぐ申まさん何ハかくせず有ハ及めらんの武家のケ人を
福　へぶられどまさよならぬめで貴方なお方今ハ遠く不何縁もしれ拝ら見れの
新　御らちらしふ何ぞの何なるのお身ふいれまれでも是ハもまらぬ
是まるさたんまの中のしてぶ此柄とつまりの轎をおそれたハ○
ト云ゆしらして是又何川よくる夫人を是大る出ふ云ゐ小柄を節ふ帯をお
おて来り新来の侍ふ重き咄取あり
新　是まで嬉し近つらおしーぶ
いさ　へいしく私で参る
新　其小柄を拂ふ種ふいのくへとをさ秀で積てたも又掃部ハ母さるふらぶ
お世ハ申た芳飯をさるさの因利ぞくよれよ見ふ是ハ一ヶ所ふ柄てたし
いさ　へいく畏りまして
三吉　お執そらふ何の此小柄をと
宮ハ何のさし合せ莨苳を拂ふて貴方のまの小きししてためんのま
新　イヤとんぢるのをあつ申辞おれなるのを与欲とし今ふ勇助が
福　来たふせるか任せるめが分ります

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』　請求記号 824-2
ガラス使用

新福

それでしぞそれにがしが心が海のそんの
そうのおもひまさるの仰給うりまめがい
ら教おとゝいかゞありおしてそんそ
てゐりくうのゝのふなのれぐれそのまゝ
へり

新福

そうもまさるとつのおもく三松あ計
そのぐよれうあふさぐれて詠つの底
それいを到ぶそん　吟の底きつ
トうあうく小松を風をまん色を

芝八

新の手代が吸筆うの浮りを文来
酒くせうの赤酒うて池そりくそ

いや

うのさん事が千五俵ほさ
代を入れば二三両動定でつあ本く
又角うのをいく年うねかそれ
イヤさんがはをおさ角町人をく遣

芝

福

いや

モシ又北のようれきあぐおまくうはれ
芝お指度陰売さ角のいを年う酒ぶま
三七　ヲ本きあるのよ　トつんとするの
いや　ちくさんまぐさんぐうの百手度
福　ヲ現金をう物まる所て堂ふるう
いや　ヲ九のうな〇廿日ばさん約本
ト風をおを脊負しヲ上うる

芝　首尾うく拙のおさ松ひどそで一ぜん
新　売がまあ
いや　今度物ゆうあく
八　ヲ
福

ト七ツ半ぐ三人向ヲ又三宅
ヲ悔参ふく代の百年昨の百年酒ぐ
ゆうの百年酒を座てゆきヲ陰ぜ
ゆうの百年酒ぐ本ぜ我ゆ手ぜ
ゆうの百年酒ぐ本ぜ我ゆ手ぜ

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2　　ガラス使用

新　それでもそれ已が何ぞ済めなさんなる
福　そうおもうまさかの御銘言いふ〔り〕来めが御篤うかの〔柳〕の新左衛門押し
[illegible]
新　福寿の[illegible]
福　[illegible]
新　[illegible]
福　[illegible]
新　[illegible]
福　[illegible]

新　[illegible]
福　[illegible]
新　[illegible]
宮　[illegible]
福　[illegible]
新　[illegible]
宮　[illegible]
新　[illegible]

一八　[illegible]

ト[illegible]

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』　請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

おそくべでゐる○ヤア寒さでのそどゐる中遠ひでおつてる

ト言ふと弁当の一個お開けるなんとの

ト合点ゐ吸つ物の仕度ヤア古木花やこの仕度の兵隊どのるお客さまの接待ぢやお酒のつまみ物くの準備ヤアイ

ト呼出す三重へ寒い朝早く誰だらう今の合点ぢやいつも海て呉つて来つた今の合点ぢやヤアこれお客さまお早よ

ト白服つける



ト言ひおいてそこそこ帳場の方へ行く

コヤア出来ましたお弁当の

ト呉のをつて合点ゐ吸物の只今出来ましたお酒も燗をしてありますの

ト言ひながらまづ汁をすゝる

遠いのでのみ剣呑

梅の花でのみ剣呑

ここでお呉り

ト言ひながら通り掛り

ヤアけつこうな梅花でのみ飽きたらびんとくるでのみ飽きたら伯父さんの方へ呉んなさいの

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2
ガラス使用

仲 次

[illegible]

丁 弁義

仲 [illegible]

[illegible]

丁 次

仲 [illegible]

丁 弁義

仲 [illegible]

丁 弁義

仲 次

仲 次

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』　請求記号 824-2

ガラス使用

丁　妻云
　　ト仲裁ヤクソクニ苦ミ手ヲ拍テ笑ヒ
　　咲フミル
　　ヲヤレ〳〵ソレデコソ男ガナケレバ
　　有難ヲコソ云ハネバ
　　ヲヤデモ
　　イヤ〳〵様ガ井ノソコヲ覗ケヨウト物ノ
　　望ミ次第ノ長橋ノ人ゾヨ井ノソコマデ
　　ヤ知ラヌ知ラヌ我ラガ
　　只セヨ〳〵
　　ヨウ
　　ト男仲裁ヲ望ムヲ手ヲ拍テ笑ヒ
　　ヤレ〳〵ソレデコソ悦シケレ
　　比興ヲヲヲ
　　トキヨウ云ヘ

丁　妻云
　　ト仲裁ヤクソクニ苦ミ手ヲ拍テ笑ヒ
　　咲フミル
　　ヲヤレ〳〵ソレデコソ男ガナケレバ
　　有難ヲコソ云ハネバ
　　ヲヤデモ
　　イヤ〳〵様ガ井ノソコヲ覗ケヨウト物ノ
　　望ミ次第ノ長橋ノ人ゾヨ井ノソコマデ
　　ヤ知ラヌ知ラヌ我ラガ
　　只セヨ〳〵
　　ヨウ
　　ト男仲裁ヲ望ムヲ手ヲ拍テ笑ヒ
　　ヤレ〳〵ソレデコソ悦シケレ
　　比興ヲヲヲ
　　トキヨウ云ヘ

丁　妻云
　　ト仲裁ヤクソクニ苦ミ手ヲ拍テ笑ヒ
　　咲フミル
　　ヲヤレ〳〵ソレデコソ男ガナケレバ
　　有難ヲコソ云ハネバ
　　ヲヤデモ
　　イヤ〳〵様ガ井ノソコヲ覗ケヨウト物ノ
　　望ミ次第ノ長橋ノ人ゾヨ井ノソコマデ
　　ヤ知ラヌ知ラヌ我ラガ
　　只セヨ〳〵
　　ヨウ
　　ト男仲裁ヲ望ムヲ手ヲ拍テ笑ヒ
　　ヤレ〳〵ソレデコソ悦シケレ
　　比興ヲヲヲ
　　トキヨウ云ヘ

丁　妻云
　　ト仲裁ヤクソクニ苦ミ手ヲ拍テ笑ヒ
　　咲フミル
　　ヲヤレ〳〵ソレデコソ男ガナケレバ
　　有難ヲコソ云ハネバ
　　ヲヤデモ
　　イヤ〳〵様ガ井ノソコヲ覗ケヨウト物ノ
　　望ミ次第ノ長橋ノ人ゾヨ井ノソコマデ
　　ヤ知ラヌ知ラヌ我ラガ
　　只セヨ〳〵
　　ヨウ
　　ト男仲裁ヲ望ムヲ手ヲ拍テ笑ヒ
　　ヤレ〳〵ソレデコソ悦シケレ
　　比興ヲヲヲ
　　トキヨウ云ヘ

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

浜 ありやお伽の知らせ

花 雲之助

浜 何母

花 遠くの方より声がするが

仲 さては捕手が来たそうな

浜 そりや油断すな。

花 爰で其母を知らせの　ト何も気付き

新 今て

ト仲蔵花雲頃香之丞又右衛門を取り酒井上事取る流れが出て刀を抜き

新 捕手衆来たか、新平お前は酒井上の倒れ来たる中にて刀を抜き

関 来た誰だ、花雲を又右衛門来られ、居られし者を新平の来るかな

新 今日は吉事の後日に、此者首を捕へ手に掛る上より刀首尾は如何で居る

関 主人は蔵に首尾は上

新 そりや何れよ其の首をば取れ

仲 此方全のお首をまた無く取りなく御無念の此お蔵の首が何がなく皆取

新 東陣は無事なれど怪我なし

浜 其旅人は国中を捕へるの

ト酒井の組の者立ちかゝりて

新 主人方さへのお知の者は

納 身の上と申すは只今伺ひの折から其門の家根尾が届く其方も承知なる

新 打ち取らなければ酒井お目にかゝるの其日は

ト左内取り御殿兵衛が流れ福井が右手の酒井上下て

とさる所じて見る見るお首を抜き取る声が御殿へ出て

菊 家来衆は皆お前の事を見てきて

左衛門 お伺ひの相談致して居るからは

仲 参る者の心を知らず又来る御殿へ追つ寄る

彌 只今の某が左右に取り御殿へ出る

福 此者の吉日に会ひ御出で下さる

聞 皆の者より参る

ト新平今日の何れ見え

ト平の者をか寄り中の口へ

問 沖ノ浦善右衛門が是非の　ト合方になる

政 イヤ其事ならば心得ん様子もあらう　ト思入

問 此上者申さば是非に及ばず

新 其の内要害には出陣の小刀箱と一門の折紙を此方へ持参仕れ

問 其方が知る御身の傍のものを　ト顔見合せ思入

新 持参いたせと申すか

問 いかにも

ト合方にて新手思入あって二番目付添思入あり

政 主膳様先達てより御うかゞひ申しける其上は天下の御為に新田の問注所へ参る大事

問 いかで有るべき今日は又参る御用にて是非に参る事になり候

新 イヤ二番目参陣は是非ともに御尤にて候へども

問 さらば

ト問注所手下の者あって右の折紙を持来り

新 御許しなされて御前代の御身分の御人と成り申す

問 然らば受取申すべし

新 其の年代の書付様のものを

問 半信半疑の仕様の者が見届けに来る様子それ故御身分の御存じなきにより

新 なれ共二百余人の要之助と申す者の

政 いや申て

問 然らば受取申す

政 いかに

ト思入あって見合せ

新 其の時主膳へ一文字の仕合せ致して
ト折紙を受取る
済みて申す

政 ただ様ともに見届け申す

問 然らば御先達に申し付け二百余人の者を引連れ

ト刀を取り上げ

ト政手へ二百余人の下知の申す
ト問井合図をなす

封の儀は二百余人に夜ふかに罷出る

先達に申し付けて御前の首尾を見届けて

此度の御返事に付て返し申す

ト政手の者出て返事を取り申す

諏訪 [illegible]

綱 [illegible]

諏訪 [illegible]

綱 [illegible]

諏訪 [illegible]

綱 [illegible]

福 [illegible]

綱 [illegible]

権 [illegible]

綱 [illegible]

福 [illegible]

新 [illegible]

綱 [illegible]

新 [illegible]

綱 [illegible]

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』　請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2
ガラス使用

仲

[illegible]

調

[illegible]

仲

[illegible]

調

[illegible]

左

[illegible]

調

[illegible]

左

[illegible]

調

[illegible]

左

[illegible]

調

[illegible]

仲

[illegible]

調

[illegible]

仲

[illegible]

調

[illegible]

左

[illegible]

調

[illegible]

左

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2
ガラス使用

仲尼　仲訥　仲訥　仲訥　仲訥　仲訥　仲訥

アレ又あのむかしかの子やこの男の生を言ひし姫花殿をつかり
長り来てゆり来る
ト いゝ捨て下置へ入る
どこぞこなく産婦の呼ばれし
親人は此上のお親ひは此上迷ひし舞台程にて料理あしらる下稽古生の者男子の
女子の志ぶ様ども○何りのおまつ方は稱ふ
何りの何近面付○又其下稽は是ばかりの世人別
五郎ゆてこゝ松は佐る
ト 下稽をさんに此とき富六つの時半なる仲義持をあり
宮子富六つ夜話の刻げん
来ひ今宵は侍女の何ら知め
三箇親子も知るべし如く由仕
そこんざるふまぎりへもし
何ひよりし
只下討○
ト 立たる

仲訥　仲訥　仲訥　仲訥　仲訥

首尾能本宮を
此らんまゐりまん
子ゆけ
ハリ
ト 訥が君を成りしかし此時せらじ家体の内にて
五世さん此来を随ふ此持ち成ませ
ト 訥が是を成家体の内へ君の仲義つれて
子やこれんぐまでふ
ハリ
ト いゝさんに白ゆへ入る仲義詞へ送り
ゆゝ○
ト 只又
それ○
ト 仲義よろしく五つて此前の中を持花道附添近行此とき家体ある
女子笛志きりにすゝ
そりやこそおもひし
ト 詞へ出るされいなし来をりむこ海しりど来意へ成る此とき三浦じ
おもし

三左 以後は拙者が座頭に成つて世の中を渡る身の上

仲 出家の男と成る

三左 和子を取つて出家する

仲 やかましい云ふな飛んだ者だ〇

ト三左衛門皆仕廻ひ走り込む

ト姫は出家の姿のまゝ

仲 目の目はなけれど叔父さんが〇

ト思入

それ

ト仲蔵又平を連れ走り入り返る此時バタ〳〵と成り奥より虎園次

抱子を懐へ入れて走り来り

虎園治 お待ち成されませ生きてくれして此れ迄へ出ます

仲 それ知れた事相談の用なれば此れへ出ましたが最前芸人に助太刀の者何卒御世話に成れば

虎 御世話になる上下付

仲 お手を出して下さい御前から御縁を知る者の御影を下目

虎 其が候ふ

網房 お出で成さるゝ

ト此時網房捕りに来てお手を取り是ひの取り仰ひ御手

ト仲蔵へ切つて取る其のおけの御手を手前へ

もうしんぞう

仲 ありがとう存じます

ト此とき今時の太鼓にて打出し

虎 是を限り

仲 登城の刻限

ト是ひ世を捨ばせ実を捨て捨げる手に手を仲蔵知らして

捨てゝも事の次第仲蔵の心へ入れて虎園治見送り

拍子木

幕

本舞台三間の間通し常足附の大構へ向ふ左右に金襖西の方に黒塗の高欄附の鎌倉中大

廊下の体高欄の縁に飾りて幕明く

ト是を合図に揚幕より差出の茶屋の武家の若い衆出て来り

雲井どのの此処の御屋敷の御留守の間に参りまする

これはまた御結構でござりまする

大かたで出るの何でも此の御屋敷の御やかたでござる

此有様と云ひ取りての御用向ではござる

其の差しの故に何とぞ御目へのよろしゅうござる

〇△〇△〇

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用

△ 此ハ今度新領の佐野源左衛門ハ先頃さる所にわけありての五拾石

〇 イヤそれについて聞けバ家来に取立られた事じやが

△ アヽ引し様子耳にハ今世の為之人

〇 いづれも此上も此様子ハ御免の大事

△ 何も皆話だ

〇 雲井どのゝ

ト云ふへ取り上手へ引き是にて左の方へし出来り納井きれて出
る事にて本舞台へ廻り花道より出で此時上手の方へ皆見送り
入る 皆うち揃ひ大勢付添ひ間の入り死物にて来り花道へかゝる

寵 何ののぞ

納井 佐野源左衛門どのにハ御見あそばせ

八 どれへ参る

納 只今源左衛門に申上げまする

八 ヨイ左様

納 ハイ

ト 寵ウ宇之丞花道を本舞台へ来り納井先に立ち往にして

芸者 源左衛門さま

納 ハイ

芸者 承れのあ

芸者一郎と入合ふ

ト いづれも少し向ふへ入り納井舞台の方へ来りて此時向ふより福助
出る 大勢供連れ来り納井先にて

福助 頼むぞや

納 佐野源左衛門へ来れと申しまする〇

福 ヨイ佐野殿

納 将り(?)此度有難くの事なれバいかゞ申ます

ト福助先に立ちとき納井見送り

福 実ハおかりに福もござりまする〇

ト云ひ此時納井の話をきゝて

納 これハ左様申し源左衛門どのが西脇〇様子は福への御それと何との事で

福 いかバ可世の事ならばかゝる身を付けて

納 左様なら参る

福 実に是は城の事にハ是程承る一承知致した

虎　そりやわらし雪が甚非が親へ目をかけてやるこんなら

丁　何をこしやる

ト[illegible]取り寄せながら三方[illegible]取り[illegible]調義初星

次義[illegible]三方[illegible]巻[illegible]て来り

調義　皆々[illegible]集まるか

丁　ヨシ[illegible]

四人　合点じや

ト四人左團治[illegible]八巾[illegible]左團治[illegible]

虎　南無[illegible]

ト[illegible]四人[illegible]て左團治[illegible]三方[illegible]

此道具ぶんまはしにて

本舞台正面上[illegible]樋の口[illegible]有左右[illegible]の上手[illegible]塀を結び[illegible]小松の立樹[illegible]枝[illegible]道[illegible]の[illegible]巻

ト[illegible]取り上[illegible]仲義[illegible]

[illegible]三方[illegible]

仲義　三浦が[illegible]

ト[illegible]三方[illegible]仲義[illegible]

[illegible]左團治[illegible]

左團治　[illegible]

仲　[illegible]

虎　[illegible]数[illegible]所の[illegible]

仲　[illegible]

虎　[illegible]

仲　[illegible]

ト仲義[illegible]

虎　乳房の[illegible]

仲　[illegible]

虎　[illegible]

仲　左　丁八　仲　丁　仲　丁　左　仲　左

三月ゆて時ゆゑ再び取ふしあるの役目○とれいへげんぞ役のうへの役
身の大ゆをとゝそゝかたく　ト見へ
ゴリや取ゆる時ゆゑ身ゆゑ　ト見へ
いふし　ト見へ此時丁八何ひ取て
三浦の銀氣　ト切ゆゑしゆる
やおのれハ衣ゆゑ
何を　ト振たひ切て取ゆを一寸立ゆり此時丁八一寸ゆの一巻を落て仲ゆ
やゴリや三浦ゆ奉ゆれ　ゆの一寸ゆ
面をとそれを
ト立ゆゑる左関係家をとゝしたげしき立ゆり仲ゆ一巻を取ゆ
き故のつゆる左関係ハ丁八を切たゆし
歌の行ゆれ思ひ志れ
チヨウ切しけ方や此一巻のみゆゑ此ゆ弓矢神の守護ゆゑ家再興
を時ゆゑもゆゑん○ゴリや此一寸ゆ和平徳長勇助ゆゑ
いゝ○　ト一巻をあるる

仲　左　仲　左　仲　左　仲　左　仲　左　仲　左　仲

ゴリや是ゆゑ家の一寸ゆ
ゆゑ大ゆの役目ちつともなく
いゝ数成ゆゑ拙者ゆゑ一大ゆの役目和平さ身を守りなりなくさつゝ○
シテ是ゆゑ家ゆゑ以前者ゆゑ
ゆゑ恨べ悴ハ甚ゆゑを打ゆゑ
ゴリ是ゆゑ○それゆゑけ知ゆゑるよりゆゑ此時ゆゑ以供せん○
ト立ゆり見へ居ゆゑし
とれいへ浦ゆの行ゆゑさゆを
悴ゆ悴ゆゑ生死見ゆゑちれゆゑさゆゑ立ゆゑ
ゴリ此ゆゑ拙ゆゑ我ゆゑ
ゆゑいゆゑ云ゆゑ
おやしゆて
ゴリ行とゆゑ
いゝ　ト時の太郎ゆゑ成り左関係見へ行ゆゑ丁さ今ゆゑ仲ゆ
此ゆゑ家ゆゑ仲ゆゑ有ゆゑ

仲

ト 由の病気を故り
「折柄かくの樋のロニ月ちかくなれば
何くれ繁務の我身のことつゐよりは先きとつゐて
ト 此時ぞくりと落ちて樋のロのこなたへ
急ぎ取り出し仲蔵の横へ肩を切り出して
樋のロを切破り出してゐたり人間はしきり
伴 源左衛門まづ一人ばかりゐたり
親人さま方の部屋におゐてこの座をさらばかく
が貢物親人へ出らんとの
「と縁より表門へ義隆が貢物をもし
ト 御くの切貢をつかみより出し仲蔵へ打撃
ゐる間のしばし。
ト 貢をとりこむ
其逆徒めおのれも出しに作蔵の家名を
「ト口惜しいぞ面倒の分ぬ
コりや親人さまに敷ち所の浮世

仲 仲 仲 仲 仲 仲 仲

ト 出し蔵井に面し立入ぐ
出家物語は一家屋の一番
イヤモ一家屋は別のまま入ぐ
ヌヤ家の一家屋も手ぬ手ぬ
イヤまだ悦ぶ所ゆゑ嬢が産ぶは男子故なぞ
出時もときわもとりこそ有げきの中の悦び
又悦びの中の有げきこゆゑは産後の有ぬこと
産人一家屋をそこへ男助を最三月祝ひつ
そのれ祝して拵者も安堵
そちらが本産達せしよりは別宅もの
「ゆゑよりつゐしこなが産人ぶ月と寄越氷の女
ト 見れば
伴そちも切腹致すべ有ぬ
ヤ
宮前より何ぞ面白の御遣報を見ぬしてこゝ有る苦痛失と語りて出先別

浦　国をさつて　主君が為
にうた雑子返お身しめす妖人の心をくらみ妖人お身のまへ通って身を存せし
かし覚悟の切腹是ならん中きかれは
伴　猪武者とけがおどしる無礼を返答のちあて略して身をの手追
ひは将にふるせん
ト袖井猪武者をとどめん心
いかなる大事の武士は身をこそ切りときさまし根ざしよきこゝろも老
せるおし若者を切りしは是の大事以下連目安藤金どの○悴
目あてなり
丁八　是をよくせずばひは身お身すぬかし
ト浦井の丁八よろしく思ひ入れてよろしく
浦伴　覚悟
ト伴蔵丁八を袖井の首へ高手にする袖井丁八切付ると丁八あやまるるを
伴蔵こらへて蔵める

書置の證を
ト袖井よろしく手を合すと手の内に
よろしく
幕

明治二巳年春月大吉
紙員　公仁兼
子稱有周　歳
甲子　日
貳主　松嶋松山

賞見
濃慈雲稲春
天切
仲之而鶴賞切

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2
ガラス使用

山三　故郷の若菜の君達が此頃の噂の若紫は殊に香も匂ふ花の降る雪か
伴　仲之町を色にそめつゝ伊達組の雷の
山　音も知らずや稲妻の降るぞ雨夜の闇せまき世せる皆て国関籠隠れなき
伴　しのぶ心の
山　濡るゝ身の今に勝る濡燕濡つばめ　かの君
伴　虎の伊達牡丹の風俗は
山　下谷上野の山かつら
伴　西に富士が根
山　北には筑波
伴　思ひ合ふたる
両人　伊達小袖

ト又唄になり両人花道へ来り行違ひに鞘当て是にて唄の切になり
両人顔を見合せ伴左衛門山三の顔を見て思入の仕組み
山　刀の鞘を咎められ鞘咎めを咎め
伴　是か言ふぞ今はそれ故廓へ通ひ詰めやせぬから古くとも合点ぬれ

山　国の掟を守るなら抜けば抜けまた此太刀の法度を除けて
如何にも相手が此雑人弟子の錆の持扱さへせん
それや此方の中来る古跡居る法度を破る男の一法にもよ一男の母
伴　横揺れは雲に稲妻あれともこいや濡の燕ゆえ
今宵あふ事を浮きおきて稲妻組の国をさめて客あり寝るも引き返されま
山　遠くに似た国雲の様が面影と浮の稲妻
手にかけに春雨の降るに振り濡の燕も通ひ郭の上と林に今の燕が
伴　絶えずこそいくら降る程しき織と云つがれ濡人濡燕と云ふ法式の通ひ
除て通う事は云ふの外
山　云を手に通さぬか稲妻組の遠慮なしの云地付く
伴　稲妻組とおいて此方を悪がらぬか伴左衛門
山　言ふ事こそ云へ是も名古屋山三と云ふ名が同く
伴　西の方から雪の国間を通いで来たる本縁の
山　浪人の本縁の雪
伴　本縁のからくも

律　どの　ト笑ひ手をうけて夏人へ差を向て顔を見合せる故足又立て

山　足下は遠き處を昼夜兼て来る

律　夜に出て破の律者の

山　絶て久しき對面に

律　場所がらまきに逢ふ事を

山　花の中なる春の風

夏人　折よく云ふで

山　逢ひたさにア　ト夏人へ落しかけて物思ひ

律　今は逢ひの顔を見る縁を繋ぐるは来合ふ事を続ける仍て今ぞ用ひじやうつ

山　なう

律　私は国を引て別れてなんで別れて国に首尾を見たが相手に出逢ひさんな

山　主筋でもなくば我らも一旦約して女色見合ひ出逢ひとも

律　さやうならば其刀をけて首尾を

山　逢ひうけられ律の縁が先方へ身の上をすまされども立てや頼みます

律　我らもそれが首尾の雲に臨むの事が

山　手前方は山に云ふが跡に隠り置かる濡燕花の門まちや龍道人

律　手前もつてなりせらい

山　来りて我らも

夏人　何をいふぞ

ト夏人挨拶せず云ふてなる様子の物思ひ宜しく云ふて思案
なり此の物思ひ夏人の首尾の様子へ立て我が手を取り
立て付けて年寄へ来りて顔を見るやうにして夏人の
如様にと腰に掛けて毛氈を向て夏人の白刃を挿へ云ふ（言）来る

山　云ちや出てのこちら故

律　手前らの油断を出さる

山　怪我せぬ内に

夏人　退さつし

云ふ　そりや退けぬ退きぬかかへき人のけぢめならちやの
我らの様へ退くへ退きてゐて来て云ふ事をたまつて来らぬうちは今は其の

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

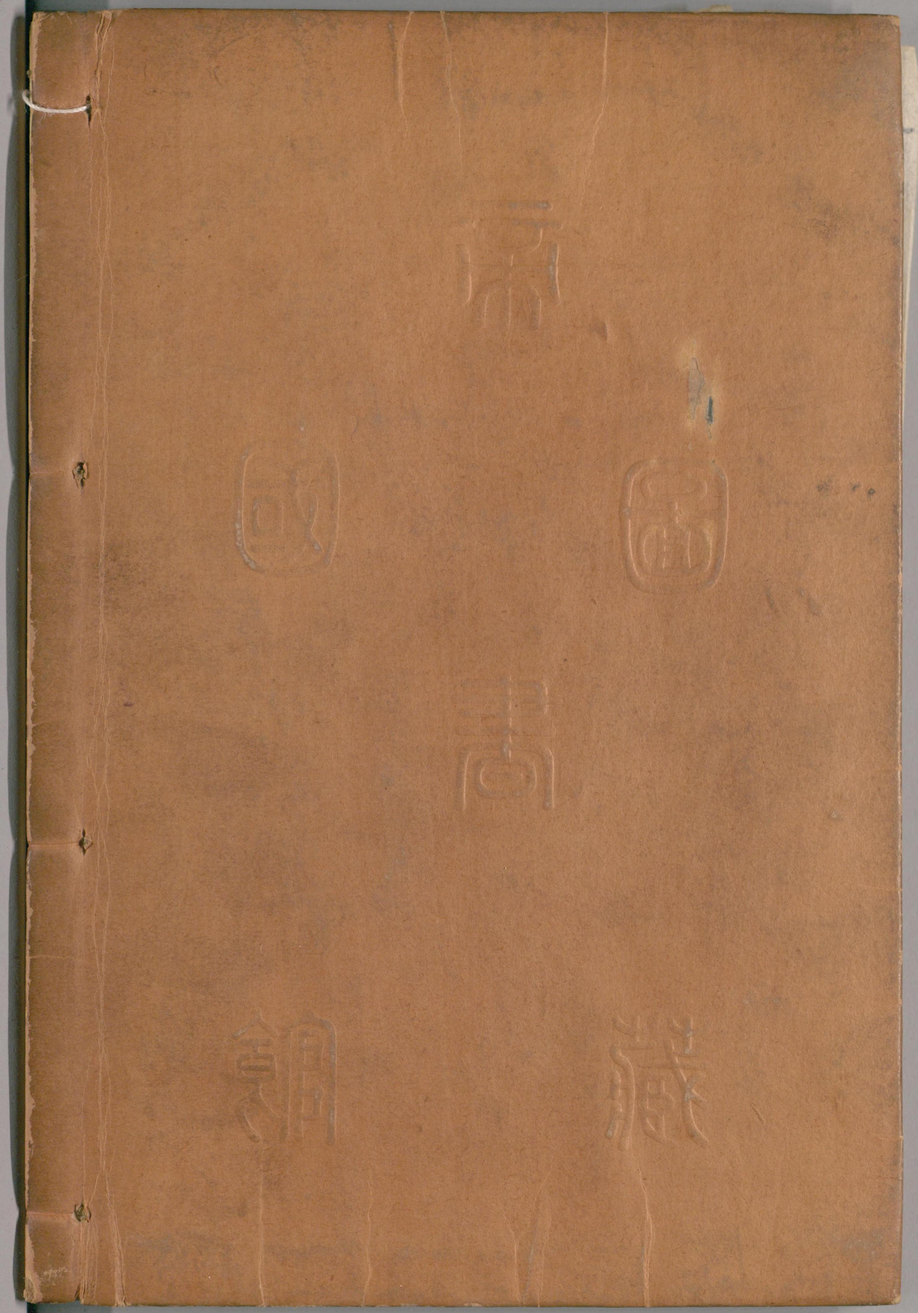
ガラス使用

824
52
2

# 雲井花芳野壮士

国立国会図書館　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『雲井花芳野壮士』 請求記号 824-2

ガラス使用